

# 信濃教育

## 巻頭言

### 自発的に学ぶ

教員免許更新制度が廃止された。今後は研修記録を作成し、記録に基づき校長が教員に指導助言を行うこととなるようである。一〇年に一度、必修領域を含む三十時間の講習を義務づけた更新制度に比して、今後は教員の主体性や自発性に任されるところが大きくなりそうである。大正時代、長野師範附属小学校に開設された研究学級が、その後の本県の教育実践に大きな影響を及ぼしたことは、周知のことであるが、この研究学級の理論的指導者であったのは、杉崎踏である。杉崎は大正五年に長野師範学校に赴任するのだが、その二年前、米国の大学卒業後長野県の学校を参観してまわり、県視学の佐藤寅太郎を訪ねている。(県視学とは、県下の学事視察、学校教職員の監督などを行った県知事の下に属した地方官)

杉崎が県教育の指導方針を質問したところ、佐藤は「指導はしません。皆が一生懸命に自発的にやるようにするのがこちらの仕事です」と答えたように、杉崎はこの答えに大いに感じる場所があったのである。私はこの杉崎と佐藤のやりとりが、信州教育の一つの側面を象徴しているように思い、「指導はしません」と言い放った、時の県視学を誇らしく思う。佐藤寅太郎はこの後第十二代の信濃教育会会長となる。

私たちは「子ども自ら」とか「主体的に学ぶ」など、子どもたちが自ら課題を持ち追究する授業を研究してきた。それは、与えられ、やらされる学習では子どもたちの真の力とはならないことを知っているからである。このことは、教員の研修でも同じであろう。指定研修や悉皆研修など、外からの研修だけでは、教師としての力を伸ばすことはできない。だから長野県の教員は教育会や各種同好会などを作り、理想の教育を実現するため、また子どもたちの幸のため、自ら求めて学んできたのである。

「教師の成長は児童生徒の成長の源」は、泉野教育で有名な藤森省吾の言葉。与えられたり、指定されたりする研修ではなく、教師が自発的に学び成長することが、子どもたちの育ちにつながるのである。